

## 「父の愛」

聖書の箇所：ヨハネ福音書 19：25～27

### <導 入>

先日、G7サミットがイギリスで開催されました。アメリカ主導で、G7の各国が協調と結束を世界に示した形になりました。G7の各国は結束したとは言え、中国に対する脅威を共有しました。アメリカのバイデン大統領は、「民主主義対専制主義（一党独裁主義）」を主張されていますが、いずれの体制であったとしても、「一つになる」ことは難しいです。民主主義では、自分の考えや意見を主張することができても、一つにまとめることは容易ではありません。一党独裁であれば、形式的にはまとまっているようですが、違う考え方を排除し、封じ込め、個人の自由が奪われています。このことは政治の世界だけでなく、会社や教会等の組織においても同じことが言えます。違いを受け入れて一つになるのは、大変難しいです。私は、今回のG7サミットでバイデン夫人が「LOVE（愛）」という文字がはいった服を着ておられたのが、印象的でした。

イエスは、いよいよ十字架に進む直前に、弟子たちのために祈られました。その中で、すべての人が愛によって一つになるように祈られました。イエスは、形式的ではなく、心の底から真に一つになるには愛によらなければならないと確信しておられました。

今日は「父の日」でもありますので、父なる神様の愛についてお話したいと思います。

### I. 神様の愛

▽父なる神様の愛を凝縮した形で現わした言葉は、ヨハネ福音書3章16節です。「神は」とは、父なる神様のことです。神様は、すべての物を創造されたお方です。空も海も山も、深海も、神様が創造されました。「この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は」と、パウロは使徒の働きの中で語っています（使徒17：24）。植物も動物も、また人間も、神様が創造されました。太陽も月も、星もお造りになりました。その種類たるや数えきれません。神様はこのように数えられないほどの物を創造されましたが、それらはきちんと調和して存在しています。違った物同士がほどよく調和しています。お互いがお互いを必要とし、無駄なく存在しています。地球温暖化の問題は、人類が欲望のために神様が創造された地球の秩序を破壊したために起こっていると考えられます。次に、「世」とは、ギリシャ語では「コスモス」で、この福音書では78回も使われています。意味は、神様に創造されたすべての人を指します。男性も女性も、どの国の人も、どの人種に属している人も、クリスチャンもノンクリスチャンも、神様は愛しておられます。社会的に注目されている人も、誰にも顧みられない人生を送っている人も、神様は同じように愛しておられます。私たちは神様を信じ、神様に愛されていることを日々体験していますが、神様を信じないで、自分勝手な生き方をしている人も神様は愛しておられます。私たちは、神様の愛は神様とともに歩んでいるクリスチャンしか注がれていないように錯覚することがあります。立場や能力、性格の違い、思想や宗教の違いに関わらず、神様の愛は同じように注がれています。神様の愛は、人の違いを乗り越えて、すべての人に及んでいます。自分に合う人、合わない人の区別なく、神様は愛しておられます。そういう意味で、誰も人のいのちを奪う権利はなく、人を排除したり、侮辱したり、差別することはできません。この神様の愛の視点に立たない限り、違いを乗り越えて一つになることはできません。「そのひとり子をお与えになったほど

に世を愛された」。「愛された」という言葉は、「アガペーの愛」の動詞形です。この神様の愛は、無限に施す愛であり、自己犠牲的な愛を指します。それは、この世の人と人との間にある愛ではなく、すべての物を創造された神様の一方的な愛です。代価を求めない無償の愛です。人の愛は、しばしば見返りを求めます。これだけよくしたから、それに対する感謝や見返りがないとよく思います。しかし、神様の愛は見返りを求めない愛です。「～ほどに」は、「無限に、数えきれないほどに」という意味があります。私たちがどのような状態であろうとも、神様は愛して下さいます。悩んでいる時も、もがいている時も、苦しんでいる時も、神様の愛は無限に注がれています。「ひとり子をお与えになった」とあります。「ひとり子」であるイエスが十字架の上で死なれたことを指します。そして「お与えになった」と言う言葉は、歴史上に起こった出来事を言います。それは、私たちの努力や、業績などによらない神様の贈り物であり、神様の恵みです。イエスの十字架に現わされた愛によって、神様はすべての人を同じように愛しておられます。イエスの十字架によって、神様の愛は確かに歴史的な事実として現わされました。この神様の愛は、私たちが日々接するすべての人に注がれています。お一人お一人が神様の愛が注がれている尊い存在です。

イザヤ40：15～17 神様の御前では、国々は「手桶の一しずく」であり、「秤の上のごみのような」存在ですが、神様は愛されています。すべての物を創造され、すべての物を治めておられる神様が、「しずく」また「ちり」のような私たちを顧み、ご自分のひとり子イエスを与えて下さいました。これが、人の思いを超えた無限の神様の愛です。この愛によって私たちは救われて、神様との交わりに入れられました。永遠のいのちの約束が与えられました。この信仰に生きているのが、クリスチャンです。このことは、どれほど感謝しても感謝しきれないことです。神様の愛はすべての人に注がれていますが、私たちはその愛を信じ、その愛に生きています。その違いがあるだけです。

## II. 十字架のもと

▽神様の愛は、イエスの十字架にはっきりと現わされています。十字架刑による死ほど恐ろしいものはないと言われていました。十字架刑は、もともとペルシャの死刑の方法でした。このような方法が採用されたのは、ペルシャ人にとって土地は神聖なもので、罪人や悪人がその土地を冒涇するのを避けようとして、考え出されました。罪人は十字架に釘づけにされ、そこに放置されたままで死にました。十字架刑はあまりに残酷なので、ローマ人には行わず、奴隷に限られていました。イエスが体験された十字架刑は、このように肉体的には極限の苦しみを伴うものでした。ところが、そのような肉体的な極限状況にありながら、イエスは十字架上で七つの言葉を語られました。ヨハネ福音書から、第三番目の言葉を見てみましょう。▽ヨハネ19：25～27 この出来事は、二つの面から見ることができます。イエスの視点から見ると、そこに神様の愛の姿があります。イエスは、十字架のもとに生みの母マリヤの姿を見られました。母マリヤにとって、ご自分の息子のイエスが十字架の上で苦しんでおられるのを見るのは耐え難く、つらいことだったでしょう。一方、イエスはご自分がこの地上を去った後、残される母の寂しさと悲しさを深く思われました。イエスは、ご自分の悲しみよりも残される母の悲しみと孤独を思い、そこにいた「愛する弟子」であるヨハネに母のことを託されました。母に向かって「あなたの息子です」とヨハネを示され、ヨハネには「あなたの母です」と言われました。イエスはご自分のことよりも、他の人の悲しみと苦しみを思われました。神様の愛は、相手のことを思い、配慮することにあります。神様は、私たちのことをいつも顧みて下さいます。満たされない心、悩みに打ちひしがれる心、出口が見えず、あせっている心を神様は愛して、思いやられます。それで神様は、罪を犯して神様のもとを離れた人類のことを思われ、何とか救おうとし、救いの計画を立てられました。そして、ご自分のひとり子イエスにその計画を委ねられました。十字架のイエスには、神様

の愛があふれていました。ピリピ2：4～8 イエスには、ほかの人のことを顧みる心がありました。この心が十字架の道を進ませました。それは、神様の愛です。普通、人は自己中心ですので、ほかの人のことを思いやることはあまりありません。このような思いは、祈りから生まれます。マザー・テレサは、次のように言うておられます。「すべては、祈りから始まります。愛する心を神様にお願いすることなしには、愛する心を持つことはできないし、たとえ人を愛することができるとしても、ほんのちょっぴりでしかないでしょう。それはまるで、今日人々が貧しい人たちについてたくさんを言いますが、貧しい人たちのことを知りもしないし、彼らに話しかけたこともないのと同じようなものです。私たちもまた、どう祈るかをわかりもしないで、祈りについて多くを語ることはできません」と。祈ることから、他の人を顧み、思いやる心が生まれ、そこから一つになる実ができます。それは、すべての人の違いを乗り越える愛の実です。イエスは、すべての人を愛して十字架の上でいのちをささげられました。

▽一方、十字架のもとにいた女性たちに目を向けましょう。ヨハネ19：25 イエスの母マリヤは、自分の息子イエスがしていることは十分理解できなかつたかもしれませんが、イエスを愛していました。この愛は、母子の通常の愛以上のものを感じさせます。なぜなら、十字架刑が執行されている現場にいることは、肉親の愛以上のものがあるからです。二人目は、「イエスの母の姉妹」です。この女性が誰であるのかは、他の福音書から「ゼベダイの子らの母、つまりヤコブとヨハネの母サロメ」であることがわかります。彼女は、イエスから手厳しく拒絶されたことがありました。彼女はイエスのところに来て、自分の息子たちに御国で一番よい地位を与えてほしいと願いました。すると、イエスはそのような野望はあまりであると言われ、彼女をいさめられました。彼女は、イエスからいさめられたにもかかわらず、イエスの十字架のもとにいました。三人目は、「クロパの妻マリヤ」です。彼女は、「小ヤコブとヨセの母マリヤ」であると言われていています。四人目は、「マグダラのマリヤ」です。彼女は、イエスが七つの悪霊を追い出されたことを体験しました。彼女は、イエスが自分のためにしてくれた愛の行いを決して忘れませんでした。それで、彼女はイエスを愛していました。そして「愛する弟子」のヨハネが、イエスの十字架のもとにいました。その状況は、目をそむけたくなるよう悲痛な現実が展開されていました。普通なら、イエスの肉体的な痛みを見るだけで気絶してしまうでしょう。それほど、十字架は悲惨な現実です。しかし、彼女たちはその現実の中に立っていました。その動機は、イエスへのひたむきな愛以外に考えることはできません。「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します」と、ヨハネの手紙にあります（Iヨハネ4：18）。彼女たちは、イエスを愛していました。そのような恐ろしい現実の中であって、イエスのそばにいました。彼らは、イエスと同じ苦しみを共有しようとしていました。愛は、苦しむ者のそばにしようとし、その苦しみを共有しようとしてします。愛は苦しむ人と一つになろうとしてします。一つになる道は、愛によります。その土台も祈りです。最後に、アッシジのフランシスコの平和の祈りをご紹介します。「主よ、わたしをあなたの平和の道具にしてください。憎しみのあるところに愛を。

不当な扱いのあるところにゆるしを 分裂のあるところに和解を  
誤りのあるところに真実を 疑いのあるところに信頼を  
絶望のあるところに希望を 闇のあるところに光を  
悲しみのあるところに喜びを もたらすことができますように  
主よ、どうかわたしに慰められるよりも慰めることを  
理解されるよりも理解することを 愛されるよりも愛することを  
人々にもたらすことを求めさせてください。

自分を忘れることによって自分を見出し ゆるすことによってゆるされ  
死ぬことによって永遠のいのちに生きるのですから。アーメン」。